

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行
第6回フォーラム研究会
議事録

日時：平成25年8月20日（火） 13：00～16：00

場所：東京大学工学部12号館2階会議室

出席者：13名（順不同・敬称略）

木村(PONPO)、足立(元気ネット)、植木(元気ネット)、円満字(PONPO)、大石(PONPO)、
神崎(PONPO)、久保(PONPO)、鬼沢(元気ネット)、渋谷(元気ネット)、
竹中(PONPO)、中岡(元気ネット)、丸山(PONPO)
土田(関西大)(社会調査グループ)

配布資料

- F6-0. 議事次第
- F6-1. 第5回フォーラム研究会議事録案
- F6-2. 第5回フォーラムに関するアンケート（自由回答）
- F6-3. 第5回フォーラム時間配分結果
- F6-4. 第5回フォーラムの反省点メモ（欠席者分）
- F6-5. シンポジウム案内状案
- F6-6. シンポジウム資料案（木村氏）
- F6-7. シンポジウム資料案（土田氏）
- F6-8. シンポジウム資料案（竹中氏）
- F6-9. シンポジウム資料案（鬼沢氏）

議題

- 0. 議事録確認
- 1. 第5回フォーラムの反省
- 2. シンポジウムについて
- 3. その他

※議論の詳細については、逐語録に記録されている。

0. 議事録確認（配布資料 F6-1）

木村氏より、資料 F6-1 に基づき、前回の議事録の確認がなされた。特に、シンポジウムに関して話し合われた内容の確認が行われた。

1. 第 5 回フォーラムの反省（配布資料 F6-2～F6-4）

第 5 回フォーラム終了後は懇親会だったため、直後の反省会は開催されなかった。そのため、反省点を各自メモしておくよう、木村氏から指示が出されていた。各自がメモに基づき反省点を述べた。要点を以下に示す。

【全体】

- ・ 冒頭の振り返りで、第 1 回～第 4 回の流れが再確認できたのはよかった。
- ・ 全体共有 2（質問に対する回答）は、10 分間では足りないのではないかと。反面、時間の捻出は難しい。
- ・ 狭そうに座っている参加者がいた。→座る場所について、サブファシリテーターの配慮が大切。

【運営陣について】

- ・ 回を追うごとに、サブファシリテーターの立場が明確になっていった。また、その立場を参加者にもアナウンスしていたため、やりやすかった。
- ・ 深掘りしたほうがいいと感じ、サブファシリテーターとして関与してしまいそうになる場面があった。どのような振る舞いが研究上望ましいのかを検討していく必要があるだろう。
- ・ 運営側（特にサブファシリテーター）と参加者間の信頼関係はどうだったか。
 - 参加者同士の信頼関係が重要であって、参加者と運営側の信頼関係は必ずしも必要ではない。むしろ、信頼関係がなくてもできなければならない。
 - 信頼よりも、場を回していく「能力」のほうが重要ではないか。

【グループワーク】

- ・ きれいにまとめようとして、議論のしやすいトピックを選んでいるきらいがあった。
 - 特にグループワーク 2 において、回答しやすい質問を選んでいった。これは、ひとつのまとまった回答を作らなければならない、と参加者が思っていたからではないか。発散した回答でもよい、ということがうまく伝われば、本当に議論したい質問を選ぶのではないかと。

- ・ 参加者が流れを理解し、時間管理も行うようになったため、スムーズに進むようになった。その反面、話題を深掘りする機会は少なかった。
→話題の深掘りについても、ルール化で対応できないか。
- ・ タイマーは効果が高かった。
- ・ 初めは、時間が短いと感じていたが、5回を通じて、短時間で意見をまとめようとするのが、結果的によかったのではないかと感じた。

【参加者について】

- ・ 伝える姿勢、聞く姿勢ができてきたと感じた。
- ・ 話し合いを楽しんでいる雰囲気伝わってきた。参加者の表情が和やかになってきた。
- ・ ファシリテーションに慣れてきたが、やはり個人差がある。
- ・ 発表時に、グループで話し合われた内容よりも、発表者個人の意見を言ってしまう場合があった。グループ内でまとめ終わった後に、要点を再度確認すべきかもしれない。
→今回は、ファシリテーターも意見を言うスタイルだった。そのため、自分の意見や、自分に近い意見に引っ張られてしまうのは、ある程度仕方がないかもしれない。
- ・ 首都圏住民参加者の問題意識の高まりが感じられた。一方、学会員参加者に対しては、あまりそれを感じなかった。
- ・ 「原子力業界の人はこう思っていると思いますよ」と発言した学会員参加者がいた。
→一人称ルールを守っていない。また、その方の発言から察するに、フォーラムの目的に対して協力しようとしていない姿勢が感じられる。
- ・ 断定口調で話す方がいて、他の方の意見が抑制されているように感じた。こういった口調はやめるよう、ルールで制限すべきではないか。

これらを踏まえ、今後、次年度のフォーラムを設計していく。特に検討の必要がある点として、以下の3点が、木村氏により最後にまとめられた。

- ・ 話を深める方法（ルール化含め）。
- ・ 運営側（サブファシリテーター）が介入すべき場面の明確化と、介入方法のルール化。
- ・ 上記2点を行う際に、参加者が公正だと感じるようにしなければならないということ。

「話を深める」に対しては、「相手がなぜそのような考えを持つに至ったか」を聞き出すことではないか、という意見が出された。

2. シンポジウムについて（配布資料 F6-5～F6-9）

木村氏より、資料 F6-5 に基づき、シンポジウムのプログラムが確認された。

次に、シンポジウムの案内状の内容が確認された。

- ・ 文言に関する指摘がいくつかなされた（詳細は省略する）。
- ・ シンポジウムで発表するフォーラム参加者の氏名は、案内文には掲載しないこととなった。（ただし、当日はお名前をお呼びする）

以上の指摘を基に、木村氏によって内容が確定されることになった。確定次第、その案内状を用いて、学会、マスコミ等に告知する。

木村氏の発表資料は F6-6 を基に作成される予定であることが話された。

また、土田氏の発表内容は、社会調査およびフォーラム参加者の選定を範疇とすることが確認、決定された。

続いて、竹中氏、鬼沢氏の発表資料の内容について議論がなされた。

【2者に共通するコメント】

- ・ ファシリテーターは参加者が行ったもの、サブファシリテーターは運営が行ったものであるということを、しっかり伝えるべき。もしくは、言葉を変えるべき（例：参加者によるファシリテーター、運営側の補助者）
- ・ 各回終了後に実施したアンケートの内容を引用し、それらの意見に対してどのような工夫を行ったかを述べてはどうか。

【竹中氏の資料に対するコメント】

- ・ フォーラムの日時を記載すべき。→木村氏の発表共々記載する。
- ・ グループワークの方法などは、言葉では伝わりにくい。図を利用すべき。
- ・ 雰囲気が分かるように、写真を掲載してはどうか。→顔の写っていない、テーブルの上を写した写真を用いる。
- ・ 1回ずつ細かく話すのではなく、まず第1回から第5回でどういうことを行なったのか、全体の流れを説明した後、各回の特徴的な出来事を説明したほうがいいのではないか。
- ・ 運営側が、自身の反省やアンケート等を受けて工夫・改善していった点を示すべき。また、その変更と研究全体のコンセプトとの関わりについても話すべき。
→ポストイットの色、コミュニケーション・マニュアル、グループワークの進め方・ブレインストーミングのやり方（一人称ルールなど）、サブファシリテーターの振る舞い・立場、タイマーの導入など。

【鬼沢氏の資料に対するコメント】

- ・ 資料が一人歩きしないように、慎重な表現を心がけるべきではないか。
- ・ できていた点、できなかった点、そしてそれらを両立させることが難しいということ、が分かるような表現があるとよい。
- ・ 元気ネットの設立年を記載すべきではないか。

最後に、コメンテーター（谷口氏）への対応について議論がなされた。

- ・ コメンテーターには、あらかじめ運営側の発表資料をお見せする。
- ・ コメンテーターには、資料の作成は要求しない。資料を作成された場合でも、印刷して配布はしない（運営側の資料は必要部数印刷し、配布する）。

3. その他

- ・ 9月18日に第2回業務推進全体会合があることが確認された。
- ・ 第7回フォーラム研究会は、シンポジウム終了後の時期に開催する予定であることが告知された。徐々に次年度のフォーラムの設計にシフトしていく予定である。

以上